

撃ちて止まむ

陸軍記念日

187

晝夜二部興行

糸女の人形浄瑠璃



四ツ橋畔

文楽座

戦決も日今



戦決も日明

乍憚口上

春もやゝ景色とゝのふ頃と相成り愈々御機嫌よく遊ばされ
銃後御精進の段大慶に奉存上候

偕而當座に於ては引續き盛況のうちに此度彌生興行の準備
とゝのひ茲に郷土藝術の特色を發揮して狂言も充分に選擇を
加え申候上に此度は特に陸軍記念日に因みて戰勝國の意氣を
昂揚すべく『偲ぶ倂』と申す新作曲を以て尊き軍神の御姿を
仰ぐ事と致し全員非常の緊張を以て上演仕り候間何とぞ當座
全座員の微衷を御諒察賜り宜敷御觀覽の程を御願申上度尙又
當興行に於て兼て御引立を蒙り居候吉田光之助の儀おすゝめ
を賜り候まゝ三代目吉田光造名跡を襲名仕候次第何分とも宜
敷御引立を賜り度以上開場の曉は全座員奮闘努力御客様の御
愛顧に酬ふ可き決心に有之候間陸續御來場の程を偏へに奉御
願申上候

昭和十八年三月

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十八年二月廿八日初日

初日 晝十一時・夜四時 二部開演
毎日 晝十二時・夜五時

御觀覽料

晝の部
一等席 二圓 五十錢
二等席 一圓 三十錢
三等席 五圓 二十錢
(各等入場税別)

夜の部
一等席 三圓 五十錢
二等席 一圓 三十錢
三等席 六圓 五十錢
初日 各等約二割引
(各等入場税別)

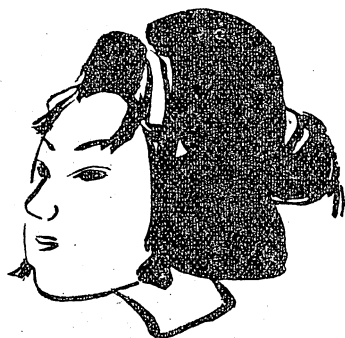
一等御座席は五日前より
御豫約取扱ひ致し居ります

豫約取扱専用電話 南 四七壹壹番
一般御用の電話 南 三〇三二番
三七八八番

お草履の準備は御座ありますが、靴、草履は
そのまゝ御入場出來ますから御便利で御座
ゐます。

晝夜二部興行

彌生の人形淨瑠璃



太夫・三味線・人形總出演

二月二十八日初日

初日 晝十一時・夜四時
毎日 晝正午・夜五時 二部開演

(晝の部)

通し狂言

加賀見山舊錦繪

筑摩川の段

鳥井又助住家の段

鶴ヶ岡草履打の段

廊下の段

長局の段

奥庭敵討の段

十二時—十二時十分
(幕間五分)

十二時十五分—一時十分
(幕間五分)

一時十五分—二時十分
(幕間五分)

二時十五分—二時五十分
(幕間五分)

二時五十分—四時十分
(幕間十分)

四時十分—四時五十分
(晝の部打出)

(夜の部)

假名手本忠臣藏

道行旅路の嫁入

五時—五時五十分
(幕間十分)

西亭譚作並作曲 村田芳生舞臺照明
大塚克三舞臺裝置
陸軍記念日に因みて
空の軍神 一 ぶ 倂

幕

五時四十五分—六時五十分
(幕間十五分)

彦山權現誓助劍

毛谷村六助住家の段

六時十五分—七時四十五分
(幕間十分)

攝州合邦辻

合邦住家の段

七時五十五分—九時
(夜の部打出)

【畫の部】

狂言やまこきやうのにしきし加賀見山舊錦繪



筑摩川の段

豊竹 松島太夫
鶴澤 徳若

筑摩川の段
鳥井又助住家の段
鶴ヶ岡草履打の段
廊下の段
長局の段
奥庭敵討の段

人形役割

前田大領 桐竹紋太郎
山左衛門 吉田兵次
鳥井又助 吉田玉造
近習 大ぜい

現在では「加賀見山舊錦繪」の外題で今回上演の如く筑摩川から又助住家、草履打、廊下、長局、奥庭までを通し上場されてゐるが、本来これは二作をつき合せて趣向のものである。即ち大槻傳藏の野心にからむ所謂加賀騒動物としての天明元年（安永九年〓二四四〇）京四條中村猪八座興行の歌舞伎「加々見山廓寫本」（奈河龜助奈川七五三助等作）を元にして作つた中村魚眼の「加々見山廓寫本」（寛政八年〓二四五六〓道頓堀東の竹本愛

鳥井又助住家の段

中 竹本 七五三太夫

鶴澤 清 八

切 竹本 大隅太夫

鶴澤 清 二郎

人形役割

女房 お大 桐竹 政 龜

倅 又吉 桐竹 龜の 輔

谷澤 求馬 吉田 榮三 郎

亭主 才兵衛 桐竹 門 造

鳥井 又助 吉田 玉 造

安田 庄司 吉田 玉 徳

庄屋 治良作 吉田 玉 助

村の 歩き 吉田 兵 次

鶴か き 大ぜ い

藏座初演)と、享保九年(二三八四)四月三日、松平周防守の内邸で局澤野(岩藤)が中老お道の方(尾上)に草履打の侮辱を與へ、お道の方は憤つて自害し、その侍女おさつ(お初)は澤野を刺して復讐したと云ふ事件を巧みに脚色して加賀騒動に取合せた容揚黨の「加賀見山舊錦繪」(天明二年正月廿二四四一江戶外記座上演)との二作を巧みに連結してお初の仇討を中心に加賀騒動の色彩を一層明確にした構成をとつたものである。斯様な例としては他に「伊賀越」の場合に「道中双六」と「乗掛合羽」とをなひませたものゝ如きがある。

尙、この「舊錦繪」と「廓寫本」とをつき合せて上演したのは天保五年二月廿八日(二四九四)初日の御霊の芝居からである。

梗概

濁流渦巻く筑摩川。雷を伴つた豪雨に夜は黒一色である。加賀百萬石の大殿前田大領は手練の馬さばきも鮮やかにこの激流を渡してゐたが突然姿を現はした曲者の爲めにアツと云ふ間に川の中へ

鶴ヶ岡草履打の段

局 岩 藤 竹 本 長尾 太夫
 中老 尾上 豊 竹 呂賀 太夫
 町人 善六 豊 竹 松島 太夫
 こし 元 竹 本 津磨 太夫
 こし 元 竹 本 越名 太夫
 豊澤 新左衛門

人形役割

局 岩 藤 桐 竹 龜 松
 中老 尾上 吉 田 光 造
 驚 善六 桐 竹 紋 司
 こし 元 大 ぜ い
 廊 下 の 段

竹 本 濱 太夫
 野澤 市治 郎

落しこまれてしまった。

それから早や五年の月日は過ぎた。

鳥井又助の主人谷澤求馬は悪人蟹江一學の讒により主家を勘當せられ、今では浪々の貧苦の臣又助の許に世を忍んでゐた。

金の才覺に苦しむ夫を見兼ねた女房お太は身を苦界に沈めて金を調べ、倅又吉等と切ない別離を悲しみ乍ら家を出て行く。

折柄深編笠に人目を忍ぶ家老安田庄司が訪ねて來た。谷澤求馬は懷中より主家の重寶菅家の一軸を取り出し、その功により歸參の取りなしを願ふのだつた。庄司はそれを受取つたが、主君は既に御他界あれしと告ぐる。

求馬、又助の大きな失望、落膽。庄司が谷澤求馬への引出物として差し出す一腰——八つ梅の紋所ある一刀。これこそ求馬が主家より拜領の逸物。勘當された時、確に望月源藏に預けたものに違ひ



人形役割

召使 お初 桐竹紋十郎

召使 お仲 桐竹紋司

召使 お冬 桐竹紋之助

局岩 藤 桐竹龜松

伯父 彈 正 吉田玉助

長局の段

前竹本伊達太夫

野澤喜左衛門

切竹本重太夫

豊澤廣助

人形役割

中老 尾上 吉田光造

召使 お初 桐竹紋十郎

町人 大ぜい

がなかつた。それを如何して——と不審でならなかつた。それとみた又助、その刀こそ自分に覺えあり、その現はれし上は主人求馬様の歸參叶ふた。下郎の手柄——と誇らかなる顔。

これを聞いた安田庄司、突然鳥井又助覺悟せよと、主君の位牌を懷中より取り出し、主君は五年以前筑摩川にて此刀にて暗殺せられ、此刀は近頃水底より得たるものと物語り、谷澤求馬と家來又助、兩人して主君を害したものとならんと詰めかけた。

求馬は立つて又助の髻を掴み折檻をする。溜息つく又助、突然我が子又吉を引きよせてその細きを首を打ち落した。求馬は竹槍を取つて又助に突かゝる。又助は太刀を取つて又向ふたが、遂ひに求馬の爲めに脇腹を刺された。そして、苦しい息の下から筑摩川に主君前田大領を討つた物語を語る——。

それは、主人求馬の仇と蟹江一學を刺さんとし

奥庭敵討の段

人形役割

豊竹	鶴澤	竹本	鶴澤	竹本	野澤	鶴澤	局	忍	召	安	こ
富太夫	友造	三瀧太夫	友平	隅若太夫	勝太郎	清友	藤	び	お初	庄司	し
							桐竹	吉田	桐竹	吉田	元
							龜松	多三郎	紋十郎	玉徳	大
								郎	郎		ぜ
											い

た時、望月源藏がそれを止め、「今討たば變の元歸りを待つて討ち取れよ」とて一刀を與へられ、教へられたまゝその刀を以つて筑摩川の川中にて討ち止めたのが意外や大殿。又助は己が腕に喰ひ付き口惜し涙にくれる。

庄司も求馬も始めて仔細を知つた。

又助は女房の心を思ひやつて泣く。その時門口に忍んで様子を聞いてゐた女房はわつと聲を上げ涙乍らに駆け入るとみるや、落ちたる刀に咽をガバと突き立てた。

安田庄司は聲をはげまし臨終の又助の耳へ懺悔に減する汝の重罪、誠の敵は望月左衛門、又助が白狀こそ反逆人の訴人も同然、功に免じて谷澤求馬の歸參を取りなすと慈悲の言葉をかける。

又助はにつことして絶命した。

櫻花爛漫として春の花時——鶴ヶ岡の社頭である。

局岩藤、中老尾上、その他奥女中が絢爛と着飾つて、春の一日も早や暮れ近くであつた。

日頃から町人の娘上りと尾上を憎んでゐた局岩藤は、意地悪るく尾上に當りちらし、その果てに大勢の前で己が草履で散々に打擲した。尾上は、然しちつと辛棒してゐた。そして數多の女中達の慰めの言葉にくやし涙を押へてゐた。

尾上の召使お初は、御殿の廊下の溜り間で大勢の腰元衆から、昨日主人尾上が鶴ヶ岡の社前で局岩藤の爲めに、散々に辱められ、その上草履で額を打たれた事を聞かされ、胸わきたゝせてゐた。

其處へ當の岩藤が奥から下つて來て、お初をみると、「主が主ならおのれまで——」と、何んにも知らぬお初をまで傍若無人に引きすえて打擲するのだつた。

お初は口惜し涙をかみしめてじつと堪へてゐた折柄、岩藤の伯父彈正が來かゝり、二人は何か

密談を始めた。二人は主家横領を企んでゐたが、中老尾上にその悪事の密書を握られてゐたので、尾上に喧嘩を挑んで相手を陥れようとして、鶴ヶ岡代參の時、草履打ちの侮辱を加へたのだつたが尾上は主家の大事を思つてその場を堪へ忍んだのだつた。

お初は主人尾上が岩藤の爲めに辱められた事が残念でたまらず、せめては主人を慰さめんものと尾上が奥御殿より下つて來るのを待つた。

やがて尾上は打ち萎れて下つて來て、身體の加減が悪ういと自室に引きこもつてしまつた。

お初は主人尾上の心を察し色々慰めた。そして、万一短慮でも起されはしないかと、忠臣蔵の判官を例に引いてそれとなく諫言するのだつた。

尾上は利發で忠義なお初の心情が嬉しくて泣けてくるのだつた。そして既に死を決した尾上はお初に藥湯を調へる事を命じ、その際に書置を書きたゝめ、岩藤に打たれたその草履と共に文箱に

入れ、里方の兩親の許へ届ける様に言ひ付けた。

お初は蟲が知らすのか、心は進まなかつたが尾上の命に仕方なく、主人の御身恙なき様にと神佛に祈つて出て行つた。後に尾上は悲歎の涙にくれお初の忠實を感謝して自刃してしまつた。

お初は心急ぐまゝに門前へ來たが、擦れ違ふ人の噂や、不吉な鳥の啼き聲に胸騒ぎを覚え、思ひきつて文箱を開くと草履と書置——。驚いて慌てゝ部屋へ戻つてみると主人尾上は早や血に染まつて死んでしまつてゐた。死體に取りすがり泣きくどくお初、然し今ではもう遅かつた。氣を取り直したお初の面には深い決意があつた。懷劍を握りしめたお初は、主人尾上の仇岩藤に怨みを報い様と奥庭へ忍び込むのだつた。

空も暗い奥庭に忍びの男が何か土中に埋めてゐる。そして合圖の笛に局岩藤が現はれた。「若君調伏の一品首首よう土中へ埋めたか、サ、褒美を

取らす」の言葉の下、怪しの男は岩藤の手にかゝつて倒れてしまつた。

さつきから様子を窺つてゐたお初が其時岩藤の前に現はれた。流石に岩藤もぎよつと驚いた。

お初は尾上の死を岩藤に傳へた。そして生前のお禮の印の形見の品と帛紗包みを手渡した。岩藤は不審乍らも開いてみると覺えの草履。主人の敵お家の仇とお初は矢庭に岩藤に切りかゝつた。念力通す恨みの刃は終ひに岩藤を刺し通した。

物音に曲者と大勢の腰元達が現はれた。その中へ進み出た家老安田庄司。お初は尾上が手に入れてゐた密書を差し出した。

斯うしてお初は主人尾上の仇を報ずると共に、お家の仇をも滅ぼす事が出來た。

やがて召使より中老役に取り立てられたお初はその名も二代の尾上と名を改めた。

——故郷へ錦を飾る日も近いお初は、斯うして忠臣義女の名を稱へられたのであつた。

【夜の部】

假名手本忠臣藏

道行旅路の嫁入



道行旅路の嫁入

娘小浪竹本南部太夫
妻戸無瀬竹本雛太夫

豊竹竹本富太夫
豊竹竹本富太夫
豊竹竹本富太夫

豊竹竹本富太夫
豊竹竹本富太夫
豊竹竹本富太夫

本曲は有名な「假名手本忠臣藏」(寛延元年「二四〇八」八月竹本座初演。全十一段で竹田出雲、三好松洛、並木千柳合作)の第八段目に當り第九段目山科閑居に續く場面である。桃井家の家老加古川本藏の妻戸無瀬は、娘小浪を許嫁の大星力彌と結婚させようとて、先方が浪人となつたのに遠慮し、供人も連れなくて母子二人海道の旅を續ける。繪巻物を展べた様な道中の美景に氣を晴し乍ら、宿々を経て山科なる大星由良之助の閑居を訪ねて行くと云ふ筋である。

(床本) 道行旅路の嫁入

浮世とは誰いひそめて、あすか川扶持も知行も瀬とかはり、よるべも浪の下人に、結ぶ鹽谷のあやまりは戀の

人形役割

妻 娘

戸 小

無 浪

吉 光之助改め

田 光

三 造

鶴澤重造
鶴澤友衛門
野澤八造
豊澤新太郎
豊澤仙松
鶴澤友友平造

かせ杭、加古川のむすめ小浪が言號、結納もとらず其儘
にふり捨られし物思ひ、母のおもひは山科の簀の力彌を
ちからにて住家へおして嫁入も世にありなしの義理遠慮
こしもとつれず乗物もやめて親子のふたりづれ、都の空
に心ざす雪のはだへもさむそらは、寒紅梅の色そへて、
手さき覺へずこどへ坂、さつたとうげにさしかゝり見か
へれば、富士のけぶりの空に消行衛もしれぬ思ひをばは
らす嫁入の門火ぞと、祝ふて三保の松ばらに、つゞくな
み松街道を、せましとうつたる行列は、たれとしらねど
うらやまし、ア、世が世ならあのごとく一度のはれと花
かざりだてを駿河の府中過、城下すぐれば氣さんじに母
のこゝろもいそぐと二世のさかづきすんで後、閨のむ
つごと、さゝめごと親しらず子しらずと、つたのほそ道
もつれあひ、男松の肌にびつたりとしめてからみし新枕
女夫が中の若縁り、抱て寝松の千代かけて變るまいぞの
睦言は嬉しからふとほのめかす、アノ母さまのさし合を
臨へこかくしてまり子川、宇都の山べのうつゝにも夢に
も早ふ大井川、水のながれと人ごゝろ新の花にくらぶれ

ば、日影の紅葉色づいて、つい秋がきて小男鹿の夫ゆへ
ならば朝夕にしん苦するの何の其、此拍手のうら若き
二人が中にやゝ産んで、ねん／＼ころゝんやねん／＼が
守はどこへいた、どことは知た其人に逢ふて恨を何とマ
アどう言てよからふと、しんき嶋田のうさはらし、我身
のうへをかくとだに人しらすかの橋こへて、行ば吉田や
の赤坂のまねく女のことゑそろへ、縁をむすばゞ清水寺へ
まいらんせ、音羽の瀧にざんぶりざ、毎日そふいふて拜
まんせそふじやいな、しゝきがんかうがかいれいにうき
う神樂太鼓にヨイコノゑい、ここに晝寝をさまされた都
殿御にあふて、つらさがかりたやそふとも／＼、もし
も女夫とかゝさまならば伊勢様の引合せ、鄙びたうたも
身にとつて、よい吉左右に鳴見がた、熱田のやしろあれ
かとよ、七里のわたし帆をあげて鱸びやうしそろへてヤ
ツシツシ楫とる音はすゞむしか、イヤきり／＼す鳴や霜
夜とよみたるは小夜ふけてこそくれまでと、かぎりある
ふね、いそがんと母がはしれば娘もはしり、空のあられ
に笠覆ひ船路のともの後や先庄野龜山、せきとむる伊勢

と、あづまの別れ道、驛路のすゞの鈴鹿こへ、あひの土
山雨がふる、ふり見ふらずみ定めなき、旅はいろ／＼う
きが中、あなたの松蔭花やかに臺笠立笠大鳥毛行列揃へ
ばつ立る武門の晴をあり／＼とうつすや田子の浦人が、
聲面白く手をたゝき、富士の白雪朝日でとける娘島田は
寝てとく帯のしんから底から戀にや夜も日も明ぬ物じや
とな、テキサかはいさが増わいな、梅の苔と戀路の文は
ひらく間を待兼山の眞實せい文色にや憂身をつくす物じ
やとな、サアサ可愛さが増わいな、うかれて歸る里わら
は、みなくちの葉にいひはやすいしべ、石場で大いしや
小石拾ふて我夫となでつさすり手にすへて、やがて大
津や三井寺のふもとを越て山科へほどなきさとへいそぎ
ゆく。

西亭謹作並作曲
大塚克三舞台裝置 村田芳生舞台照明

陸軍記念日に因みて

偲しのふおも倂あ 空の軍神

幕

壹

母キミノ自
加納敏雄
田路分天人
後市吏負
菊
母キミノ自
加納敏雄
田路分天人
後市吏負
菊

列

豊作 出太夫
百幸 織太夫
百幸 南都太夫
百幸 雅太夫
百幸 潤太夫
露澤 寛太夫
豊澤 新太夫
人形 後割
吉田 栄太夫
吉田 我太夫
吉田 我太夫
吉田 栄太夫
吉田 小太夫

(床本) 俤 ぶ 俤

神風の彌生の空を吹きなびく、春は越路へ歸るなる雁の渡るか二聲三聲、花も臘に暮れそむる餘寒の町の所澤木の香ただよふ新開の家居も親子水入らぬ樂しまどいも十年ぶり母は仕度之餘念なき、煙りも細き裏道へ心安造技折戸明け、ハイ御免なはりませ、と言ひつゝ這入ればヲ、これは安造さまか、サアまアどうぞ、ア、モおかまい下さりまするな、實は北海道の兄貴より加納さんにもお上げしてくれと言ふて、鮭を送つて來ましたで、珍らしくもないでせうがほんの少し計り、それはマア結構なもの、俤が歸つたら喜びませう、離れてゐてもお心添え早速お禮出しませふ、いつも貴方にはお世話になる計り何の御隠居さま、兄はいつも申して居りました、屯田兵で北海道へ入植した當座は、亡くなられた加納さんに随分お世話頂きましたそふで。これはマアお古い事をいつまでも、それとても御國の爲にした萬分の御奉公、丁度今日は亡夫の命日、故人も地下で喜んで居りませふ。アそふく奉天で御戦死なされた今日は陸軍記念日、こりやまアお精進日に、えらいものもち込みましたわい。

イエー主人の大好物、定めて悦んで居りませふに。ヲ、幸ひ、と申してはすみませぬが、どれ一寸御参りさして頂きませふ。これはマア御心づかひ、サアくどふぞマア是へ、とついと立て母親は、佛壇がわりの違ひ柵まつる寫眞に御明りも淡き灯影の小石道、心も加納敏雄少尉いそくとして家に入り、おツ母さん只今。敏雄がお歸りかい。ハイおそくなつてすみません、オツ安造さんですか、毎度母がお世話になります。これはお歸りなさい、日々御苦勞様です。敏雄や今日は、結構なお前の大好物を頂きましたぞ。そふですか、いつとても御心配に預り有難ふ。イヤ今日のお父さんの御命日をうつかりして、生ぐさの持つて來ましたで、今お寫眞にお詫びして居りましたわい。イヤくお詫び所じやないよ、親父も好物、寫眞が禮を云つて居ますよアハ……。これはどふも、したが、貴方の御評判が良いので、其方が嬉しいでせふ、ねえ御隠居さん、それにしても毎日の御訓練さぞお勞れでせふ、然し日本も進んだものですな随分いろくたくさんさんの飛行機がありませふな、今日は、いつもと違ふ飛行機が飛んで居た様ですが、ありや今度の

新型ですか、何といふんです。と問へど答へも無き少尉、こなたは安造、口輕々氣もかるゝと猶續け、日本の飛行機で一番速いのはどれほどの速さです、米國あたりの飛行機に負けんのも出来てゐるでせふな、今日日本に何臺程實際數があるのか、この所澤の航空兵だけでも私の目算ではマアと安造は、振子の虎の首ならぬひねりくねらす胸算用、指折り數へ言はんとす、とたんに大喝加納の一聲。だまり給へ、君はスパイか、軍の機密を空算用、そのまゝには差し置かん。と軍刀つかみ立上り、顔色變れば安造驚き、ト、とんでもない、わしや日本人じゃ、ナ、何もそんなつもりで、と身もがた、春の雷初鳴りに猫の驚く如くなり、敏雄は思はず、ハ、ハ、冗談だよ安造君、一寸野口教官殿を眞似て見たんだ。エ、ア、吃驚りした。怒り顔見た事のない貴方ゆへ驚きも百倍でしたよ、ア、熱い。ハ、ハ、赦し給へ、然し安造君、軍の事は言はずもがな、事國防に關する事、たとへ些事たり共、口にすべからず、敵性國に洩れたらば、それこそ大なる結果を來たす、防諜精神鐵石堅固でなくちやいけませんよ。言はれて安造頭をかき、やこい

つはうつかりあやまりだんまりだ、好きな義太夫にもいふてありますよ、それ蟻の穴より堤も崩るゝ輕い様でも重い事、ひそ／＼言ふて人も聞くとね、知らぬ／＼と眼をいからして石の上なる達磨さんだ、アハ、すみませんそんならおいとまいたしませふ。安造さん足元に氣をつけて、アお内儀さんのお目出度は來月かえ。オツト御隠居さん、それも防諜何事も言はざる見ざる聞ざるの庚申宵の臘月町に去る影見送る母。ホンニまあ、いつも面白人、サアお前空腹だろふ、ドレこしらへませふ。イヤ残念ながら今日は矢島などゝ用事の都合で食事を共にしましたので。ヲ、そふかい、そんならマアお茶など入れませふ。と差出す茶花も温かき母の慈愛のうるほへり。ホンニそれ／＼、今日近所の奥様達より聞きました、が、今度の卒業式に、成績も一番とかで、畏れ多い事ながら、お天子様の御前で天覽飛行の光榮にも浴するとか何にも言はぬものだから、私しや却て赤面したよ。エ、そんな話誰方がしたですか、イヤまだ確定した儀でもないんですが、よしましたそふでも、早く話して御心配かけるのは悪いと思ひ、申し上げぬつもりで居りました。

何のお前、お前の光榮は加納家の光榮、亡き父も、またお前の事を案じて死んだ農夫や兄も、どれ程喜ぶ事か、うんと頑張つておくれ、其時は見苦しい態度を見せぬ様に。ハツ責任の重大は痛感して居ります、戦時にあるも

平時にあるも責任感念に二様はありません、最企の努力を盡して、お父さんにも、又厚恩の兄さんに對しても、笑はれぬ様いたします、然しお母様軍人は、別して航空兵は平時も戦時もあります、イヤ萬々大丈夫ですが、それまでも萬ヶ一其時は歎かずに願ひます、只、其時の先立つ不孝は前以つてお詫び致して置きます。と健氣に放つ言葉の矢。かへらじとかねてぞ思ふあづさ弓、丈夫男の雄々しきは實にや楠士の後裔の面影實にあらはせりヲ、良く言ひました、それでこそ加納の子なれ、我子なれ、何の母は歎きませふ、加納家の先祖は楠様の御意志を汲む、南士の家、君に捧げまつたからは、我子であつて我子でない、死すべき時に死してこそ武人の譽れ、君に忠なり親に孝、だが大死はなりませぬぞ。ヲホ、、、、飛んだしめり話しに落ちましたの、それではぼつ／＼寝むとしませふ。ハイ、おツ母さまお先きへ、私は

まだ調べものゝ整理をいたします。そうかい、では、風引かぬ様にの。と取り出す丹前着がへもの、情けもこもる春の夜を鐘のひびきもおぼろなる、淡き一間へ入る母の夢路樂しく更けて行く。

月さへいつか水無月に、まだ名残り降る五月雨の小止む朝空明けはれて、啼き連れたわむ群雀に目覺めしか母のしわぶき聲田鶴子はそれと、お母さま、お目覺めでござりまするか聲に母親つくろひ出で、ア少し寝過ぎましたかな、子供達は。ハイ、元氣で登校いたしました。それは／＼イヤ思ひがけない夢を見てつい寝過ぎました。

とは、どの様なお夢。敏雄の夢、それも、もふ十四年も前の夢、敏雄が飛行學校時代の夢ですよ。おや／＼、それはおなつかしい事、ではもふ少しお寝みなら戦地のお夢も見ませうものを。ほんにそふでしたの、どれ顔を洗ふてから、ゆつくり朝餉の話しの樂しみ。と母はかなたへ立て行く何氣なけれど聞く妻の胸にあやなすもつれ糸柳の風と流せども騒ぐ血筋ぞ一つなる、まづかたづけと立上る、折ふし表へ足音して、御めん下さいませ、

加納さまのお宅はこちらですか。訪のふ聲に妻田鶴子、ハイ、加納敏雄の宅でございます。私は役所の者、エー如何申してよろしきやら、誠に、エーまことに今度は、御主人様。言ひつゝ一書取り出す。エツ、夫が。ハイ、いづれ原隊より公報がありませふが、去る五月二十二日に、言ひも終らぬ一瞬に、かねて覺悟もさすが實に、それとさとりて居ずまい正し。もしや、病死では。イエ／＼名譽の御戦死立派な御最後の由、我等國民として衷心哀悼申し上げます。言葉少なに口裏に心のまことあらわれし。左様で御座いまするか、それ承り安心をいたしました、夫も定めて満足に御楯と散つた事と存じます、御丁寧なる御言葉有難ふ御座いました。それでは、何れ改めて御伺ひ致しますれど、今日はこれにて失禮いたします。言ふも濁りの言葉墨辭を低ふして役所人、疊る思ひに五月だれの心を空に歸り行く。見送る妻の後かげ、それともれ聞く母親の、夢路を偲ぶ目の内に嬉し涙の一雫。ア、お母さま田鶴さん…………。お覺悟は…………出来て居ります…………、田鶴は軍人の妻でござります…………、

お母さま…………。心配なく、私も加納の母です。ハイ。サア御奉告をいたしませふ。と母は御明かし神棚へ、妻は寫し繪取り出だし、有りし面影今更に偲ぶも過ぎし夢の空、手向くが如く若鷺の。田鶴さん、アノ飛行機の音、悴は今も生きて居りますのふ。ハイお母さま、家にも三人の子供達、まだ／＼第二第三の加納は生きて居ります。ほんにのふお前さまもこれからがまこと日本の母ですの。笑顔に交す胸と胸、目と目にかくす一露も、悲し涙は宿らねど、嬉し涙をぬぐふ目に、兒を育みの老雲雀、啼く音に晴るゝ五月空まぶし陽影の輝けり。

彦山ひこさん權現ごんげん誓助ちかひのすけ劍だち

毛谷村六助住家の段



毛谷村六助住家の段

中竹本住太夫

野澤吉三郎

切豊竹古靱太夫

鶴澤清六

天明六年閏十月十八日（二四四三）より初めて大阪道頓堀東の芝居（座本竹本千太郎）に上演された。作者は梅野下風、近松保藏の合作。全十一段よりなり、殊に第五一味齋屋敷、第六お菊返り討、第七瓢箪柵と共にこの第九毛谷村六助住家が最も名高い。

梗概

長州藩の武藝師範吉岡一味齋は微塵流の達人京極内匠の爲に闇討にあつて殺され、それが不覺とあつて家は改易、一家は敵を尋ねて行方定めぬ旅にさまよふ身となりました。

吉岡にはお園、お雪と呼ぶ二人の娘があつて、お園は豊前毛谷村の六助と許婚、お雪は他に嫁して彌三松と云ふ子が有ります。そのうち姉妹は敵

人形役割

駕	娘	一子	京	藤	斧	母	柿	栗	軍	曾	微	毛
か	お	彌三	助	六	右衛門	お幸	造	右衛門	八	平次	塵 實ハ京極内匠	谷村六助
き	園	松	助	六	門	幸	造	門	八	次	正	助
大	吉	桐	吉	吉	吉	桐	吉	吉	吉	桐	吉	吉
ぜ	田	竹	田	田	田	竹	田	田	田	竹	田	田
い	文	小	龜	藤	玉	政	常	兵	多	紋	玉	榮
	五	紋	夫	一	造	龜	次	次	郎	太	德	三
	郎									郎		

にめぐり會ひましたが、お雪は返討になり、お園も亦彌三松と別れ／＼になつて了ひました。

一方京極内匠は其後微塵彈正と變名して小倉の城下に來ましたが、八重垣流の達人毛谷村六助と試合して勝つた者は、五百石を以て召抱へるとの高札を眼にして、仕官の望みある彈正は、六助の孝心と俠氣につけ入り、親孝行の爲と偽つて、秘に勝を讓つて呉れるやう頼んだのです。六助は、親孝行の爲とあればと、小倉の家中の立會ひの下に勝を彈正に讓つてやりましたが、彈正は却て六助の未熟を嘲つた上、其額に扇で傷までつけて歸るのでした。

此處に吉岡の後室お幸は、はる／＼旅を續けて六助の家に一夜の宿を求め、六助の骨柄を見こんで親子になつて呉れと頼みますが、藪から棒とて六助はただ／＼あつけにとられるばかりで、兎も角もと、お幸を一間の内へと案内するのでした。そして其身は鳴く鶯に亡母を偲びつつ、看勤に餘

此処松竹下豊竹古歌
 相勤申候



江戸

念もない折歸つて來たのは孤兒の彌三松です。

彌三松は母には死別し、伯母お園とはぐれた後、情深い六助に拾はれて、まるで我子のやうにいつくしみ育てられてゐるのです。六助は玩具を出して彌三松を遊ばせるうち、いつしか彌三松は寢入つて了ひますが、其所へ訪れたのは虚無僧姿のお園です。

お園はかうした姿で諸國を巡り歩き、敵の行方をもとめてゐたのですが、今しも此家の門口を通りかかり、見覺へのある彌三松の着物の干してあるのが眼についたのでした。

然も此家の主こそ、未だ見ぬ夫六助であつたのです。

お園は最初彌三松の着物を見た時、てつきり是は、いつぞや我家來を手にかけて、路銀はもとより、妹の遺兒まで奪ひとつた山賊の住居と思ひこみ、家來の敵と六助に斬つてかかるのでしたが、仔細を聞いて始めて我が夫と云ふ事が分り、夢か

と喜ぶのでした。ト此時奥からお幸も現はれ、亡父に代つて改めて二人に祝言させるのでしたが、折柄袖仲間が、斧右衛門の母が殺されたと死骸を昇ぎこんで來て、六助にどうか敵を討つてやつて呉れと頼みます。死骸を見ればこはいかに、それは彈正が孝行の種に使つた老婆です。

始めて六助も彈正の奸計にかかつた事を知りますが、又お幸、お園に聞いた恩師吉岡一味齋の敵の様子も、如何にも彈正のそれと符節を合はせますので、此處に彈正こそ京極内匠に紛れなしと云ふことが分るのでした。

六助は再び試合を願出で、美事彈正をうち負かした上、仇討御免の訴狀を出さうと、小倉の城へ急ぐことになります。

攝州合邦辻

合邦住家の段



安永二年（二四三三）二月、大阪北堀江座初演。作者は菅專助、若竹笛舩の合作。全曲は上下二巻より成り、上の巻は發端があらわれの松原毒酒の場、中が高安館、切が繪旨取戻しの場、下の巻は口が天王寺西門の場、切がこの合邦住家の段に分れてゐる。

合邦住家の段

梗概

前 豊 竹 呂 太 夫
豊 澤 仙 糸

後 竹 本 織 太 夫
竹 澤 團 六

安井合邦の娘お辻は、氏なくして玉の輿、河内の國の領主高安左衛門の後妻玉手御前と云はれる身になつた。

所が如何なる天魔が魅入つたのか、義理ある先妻腹の子俊徳丸に想ひを寄せ、何かと云ひ寄るので、俊徳丸は道ならぬ戀に堪えかねて、許婚の浅香姫と手をたづさへ、玉手の親の合邦の庵室へと

人形役割

親	合	俊	玉	合	奴
合	邦	德	手	邦	入
邦	女	丸	御	女	平
桐	房	桐	前	吉	桐
竹	吉	竹	吉	田	竹
門	田	紋	田	榮	龜
造	小	司	光	三	松
	兵		造	郎	
	吉				

身をさけたのであつた。この事を知つた玉手は、尙も俊徳丸の後を慕つて、合邦の庵室まで追つて來たけれど、合邦は俊徳丸から娘玉手の邪戀を聞かされて居るので、高安殿への義理を思ひどうしても門口も踏せぬと、内へ入れやうとしなかつた。

然し追に母は女の身の心弱さから、玉手を幽靈と云ふ事にして、幽靈ならば入れても仔細はありませんまいと合邦を説き伏せ、漸く内へ入れて不義の云ひ譯けを聞かうとした。と玉手は云ひ譯けどころか、「思ひ切られぬ戀の道、俊徳様の御行方尋ね、女夫にして下され」とかき口説くあり様なので、合邦は今更の様に呆れ果て、俺も以前は青砥某と云ふ歴とした武士、浪人しての捨坊主ながら、誠の道を通して來たに、と怒り立ち、唯一刀に斬つて捨てんとした。

母親は、これをなだめ、必ず娘に思ひ切らせて見せますと、玉手を無理に奥の一ト間へ連れて行

つた。

折柄奴入平は俊徳丸の後を尋ねて來たのだつたが、フト玉手の姿を見付けて、様子をうかがはんと傍に身を忍ばせて居たが、一ト間から兩眼盲た俊徳丸が、浅香姫に手を取られて、なよなよと現れるので、入平は、斯くまで玉手御前が執念深くつきまとふ上は、一刻も早く此の家をお立ち退きあれかしと、既に伴ひ出やうとした。

その時玉手は奥から走り出で、俊徳丸に取り縋り、入平の意見の言葉も耳に入れず、又しても切ない戀をうつたへるのだつた。

これを耳にした合邦はたまりかね、一刀脇腹深く刺し通し、その息の根を止めやうとするので、玉手は是を、しばしと止め、痛手に悩みながらも「是には深い様子のあること」と、自分の苦衷を物語つた。

それは、高安の妾腹次郎丸が、奸臣坪井平馬と心を合せ、己が家督が繼がんものと、その爲に俊

徳丸の一命を奪はんとしてゐる事を知つたので、心にもない戀をしかけ、毒酒に形相を變へさせたのも、御家督さへお繼ぎなくば、お命に別狀なからうと、思ひ餘つての思案だと云ふのである。そして又、かうしてお後を慕ひ參つたのは、此の病を本腹させるため、と云ひつゝ手にする鮑貝を出して、寅の年月揃つた我が血汐を盛つて、俊徳丸に飲ませると、不思議や人相はもとの通りになるので、一同は初めて玉手の苦計を知つて今更涙にくれるのだつた。

その時には、もう玉手の最期は近づいて居た。合邦が取り出す百萬遍の珠數の輪の中で、玉手御前は、一同に見守られつゝ、大往生を遂げたのであつた。



文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來
舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おおよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶暦あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があら

はれて音樂上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡単に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふや

うになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。

今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣

ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のはもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞

臺に相當して、屋内に用ひられる。最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつたそれが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、

出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で、複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)

觀賞おぼえ

昭和十八年三月 日

通し
狂言 加賀見山舊錦繪

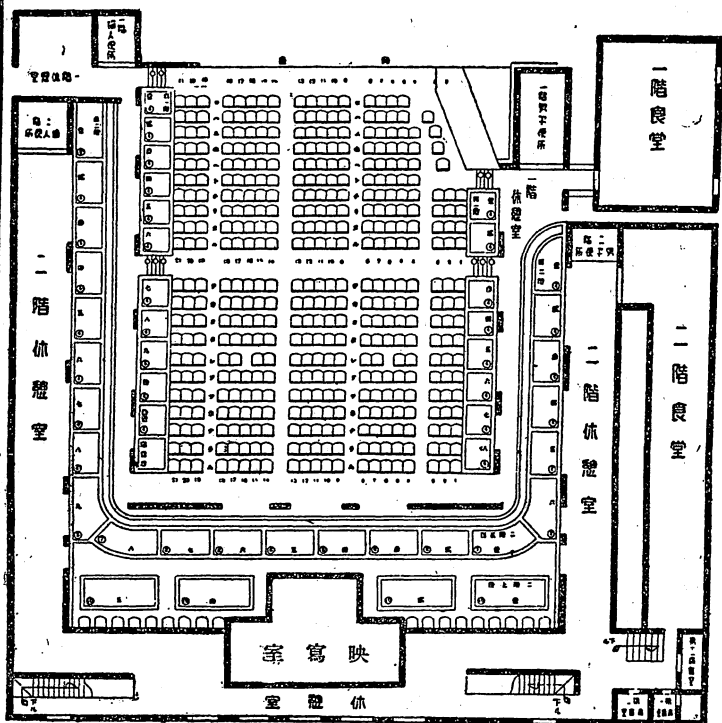
假名手本忠臣藏

空の軍神 偲 ぶ 倂

彦山權現誓助劔

攝州合邦辻

文樂座御劇場席案内



御、観、覧、席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

豫、約、切、符・壹等席のお切符は五日前から御豫納取扱致します。

また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝに好きな處が御自由にとれます。御用命の御節お呼出しの電話は

南四七壹番で御座ります。

切、符、賣、場・右指定席切符は當日豫約とも正面西側本家入口にて取扱して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

京阪神松竹系各座三月興行お知らせ

大 阪 花 座 南 電 一 四 五 九	大 阪 天 座 南 電 七 八	大 阪 中 座 南 電 二 七 九	大 阪 歌 舞 伎 座 戎 電 二 八 二
新 興 演 藝 特 輯 番 組 毎 日 正 午 二 回 開 演 日 曜 ・ 祭 日 ・ 十 時 開 演	金 井 修 一 座 毎 日 正 午 二 回 開 演 日 曜 ・ 祭 日 十 時 開 演	東 京 劇 團 新 派 大 合 同 毎 日 夜 畫 五 正 時 午 二 部 開 演	當 る 三 月 興 行 大 歌 舞 伎 毎 日 夜 畫 五 正 時 午 二 部 開 演
觀 劇 料 階 下 席 九 三 階 上 席 一 六 八 (稅 別)	觀 劇 料 平 場 椅 子 席 六 九 一 等 席 一 三 〇 (稅 別)	御 觀 劇 料 四 等 席 一 五 〇 三 等 席 一 九 〇 二 等 席 二 五 〇 特 等 席 二 九 七 (稅 別)	一 部 觀 劇 料 櫻 花 席 一 〇 〇 三 等 席 一 〇 〇 二 等 席 一 〇 〇 一 等 席 一 〇 〇 四 〇 〇 (稅 別)
神 戶 劇 場 淡 電 四 四 〇	京 都 南 座 紙 電 一 一 五 五	大 阪 大 劇 場 戎 電 二 一 三	大 阪 あ べ し 劇 場 戎 電 三 九 五
籠 寅 演 藝 大 會 毎 日 夜 畫 五 正 時 午 二 回 開 演	松 竹 家 庭 劇 毎 日 夜 畫 五 正 時 午 二 回 開 演	大 阪 名 物 ・ 年 中 行 事 春 の お ど り 松 竹 歌 劇 團 總 出 演 堂 々 全 二 十 一 景	一 番 安 い 笑 ひ の 劇 場 毎 日 正 午 二 回 開 演 日 曜 ・ 祭 日 ・ 十 時 開 演
觀 劇 料 三 階 四 五 一 等 椅 子 七 七 特 等 席 一 五 〇 (稅 別)	觀 劇 料 四 等 席 五 〇 三 等 席 七 〇 二 等 席 一 〇 〇 一 等 席 二 〇 〇 (稅 別)	同 時 封 切 映 畫 是 一 週 護 る 影 二 週 陸 軍 航 空 戰 記 三 週 風 雪 の 春	觀 劇 料 階 下 席 五 四 階 上 席 九 三 (稅 別)

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の

體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 曾に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来来ますやう、皆様の御期待に

背かね様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが御御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店 は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マージを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は半勝手代役にて相勤めますから豫め御承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第登壇、どうぞ御利用下さいませ。

專用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十八年二月廿六日印刷 大阪市東區久左衛門町八番地
昭和十八年二月廿八日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市東區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店
總發行所 鳥江 鏡也

大阪市西區土場窪二丁目十二番地
印刷所 永井日英堂印刷所 一部
金二十錢

